



『湖畔の夕映え カルシユ博士と松江』

若松 秀俊さん(東京医科歯科大学教授)

著者に聞く 偶然の出会いで 調査にのめり込み

大正から昭和初期にかけてのこと。旧制松江高校(現島根大学)の教壇に、フリッツ・カルシュ博士(一八九三—一九七二)というドイツ人哲学者が立っていた。東洋・西洋の哲学をはじめ、自然科学に至る幅広い学識を持ち、「長崎の鐘」で知られる医学者の故永井隆氏など多くの若者に影響を与えた。

松江の外国人教師といえは、何と言ってもラフカディオ・ハーン。その影に隠れて、カルシュという名は今ではほとんど知られていない。だが、仕事で訪れたドイツ・シュツットガルトのホテルで博士の娘に偶然出会

ったことから興味を持ったのが、東京医科歯科大学教授の若松秀俊さん(五五)。家族のもとに残った膨大な資料や、教え子たちの回想などをものにして、事実を踏まえた伝記風の小説として書き上げたのが本書だ。

「自分でもどうしてこんなにカルシュ博士の調査にのめり込んだのか分からないですね」と若松さんは不思議がる。本来の専門は医療用機器の開発で、医者から離れた場所においても患者を診療できる「遠隔医療システム」研究の第一人者だ。

だから、歴史上の人物の調査などは専門外。ある学術団体に

研究費の助成を申請したこともあるが、「この分野では名前も実績も何もありませんから、まるで相手にされませんでした」と苦笑する。それでも私費を投じて地道な調査を続け、遺族や教え子のあつい信頼も得た。今では多くの貴重な資料を見せてもらったり、預けられたりするようになった。

出来上がった本を手に、「小説なんて自分が書けるとは思わなかった。それまで論文しか書いたことがありませんでしたから」と少し照れくさそうだが、九十代前後になった博士の教え子たちからは「感動的だった」と賛辞が寄せられたという。

今はこの本をきっかけに、カルシュ博士を顕彰する機運が高まるよう願っている。松江市内には博士が家族と十四年間暮らした官舎が今も残っており、そこが記念館にならないかと考えている。「遺族からも『記念館ができれば遺品を贈りたい』という申し出があります。博士の遺品には松江の風景や当時の風俗を写した珍しい写真などもたくさんあって、どれも貴重なものです」と若松さん。本の収益も、すべて記念館建設に寄付するつもりだ。

文芸社、一、二〇〇円。

(三品 信)